
ブギーマンは殺せない

溝蠍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブギーマンは殺せない

【Nコード】

N4861I

【作者名】

溝蠅

【あらすじ】

ハロウィンの夜、それは遂に甦った！包丁が煌めき、鮮血が舞う！奴を殺さない限り死は止まらない！

0：前日（前書き）

現存の設定と異なる点があります。ご注意ください。

0：前日

アメリカの地方都市ハドンフィールドの郊外。この日のカレンダーは10月30日を示していた。

住人達は皆、明日のハロウインを楽しみにしている。一部の家の玄関には既にジャック・オー・ランタンが飾られている。

ハロウインが余程待ちどおしいのだろう。街全体が胸を踊らせ、活気づいていた。

もはや、十数年前の惨劇は過去のものとして忘れ去られていた。そんなお祭り気分のはずれに、一軒の廃屋が建っていた。

かつてはどこにでもいるような家族が明るく笑って暮らしていた、二階建ての一軒家だった。

しかし、その栄華はとうの昔に滅び去って、家は過去を懐かしむかのように静かに佇んでいる。現在、その家を持っているものといえば、全く手入れがされていない草ぼうぼうの庭に鎮座している腐って壊れた木製のブランコ、埃で黄色っぽく変色した真っ白な壁、玄関から中に入れば蜘蛛や蛾などの毒虫が王国を築き上げている部屋の数々、階段を登って二階を見ると、いつから開けっぱなしかわからない窓から吹き込んだ落葉が積もっている寂れた部屋が幾つもある。

居間の片隅に設けられている扉を開けると、地下に降りる階段がある。その先には、比較的整頓された部屋、地下室がある。

床は何枚もの木の板で作られており、壁は土壁だった。中央には大きな木の机があり、同じく木で作られた椅子が2つセットになっていた。また、ドブネズミが住み着いており、彼らの糞の悪臭がこもっていた。

1：覚醒

10月31日 午前3時30分

ハドンフィールドの住民の大半が寝静まり、元気に活動しているものといえば野良犬くらいの時間帯。そんな時、廃屋の地下室でひとつの邪悪な存在が目を開けた。

所々が破損した天井から射し込む月光明かりで「それ」の姿形はおぼろげながらわかる。「それ」はどうやら人の形をしているようだ。

「それ」がのそのそと上半身を起こすと、体の周りに集まっていた何匹かのドブネズミが驚いて逃げていったが、日が沈む頃からぐっすり寝たままの、まだ子供らしい一匹の小さなドブネズミが騒動にもかかわらずまだ目を覚まさなかった。「それ」はその子ネズミを見逃さなかった。哀れな子ネズミは素早く腕を伸ばした「それ」に胴体を左手でがっしりと掴まれてしまった。細くしなやかな指に似合わず強力な握力を持つ手は、目を覚まして苦しそうにもがく子ネズミをしっかりと掴んで離さなかった。「それ」は子ネズミを掴んだままの左手を目の前に持つてくると、右手で子ネズミの頭を鷲掴みにし、眉ひとつ動かすことなくその頭を180度捻った。

「チュウ」と子ネズミは鳴いた。ポキリと乾いた音がして、子ネズミは事切れた。筋肉の反応で手足は細かくビクビクと痙攣していて未だに生きているかのようにだったが、口からは力無く舌がダラリと垂れ下がっていて、もう死んでいる事を証明していた。ただの肉袋と化した子ネズミを「それ」は不思議そうに見つめ、くいつと首を傾げた。

そして、右手を頭から離し、床に無造作に転がっている肉切り包丁を拾い上げた。

「それ」の右手に収められた刃渡り20センチの包丁は、今まで数多の生命を奪ってきた恐ろしい包丁だった。ある者は口からうなじまで貫かれて、後ろにあつた壁に縫い止められた。またある者は、身体中を滅多刺しにされて死んだ。今まで数え切れないほどの命を奪ってきた刃は、また新たな犠牲者の血でその身を染める事になった。

「それ」に握られた包丁は子ネズミの喉に浅く刃先を突き刺した。じわりと、僅かに開いた傷口から血が滲んだ。「それ」は躊躇うことなく肛門まで切り裂くと、切り口から血が、ポタポタと流れ落ちた。左手が少し血で濡れたが、「それ」は気にせず背中を掴み続けた。

先が血に濡れた包丁を床に突き刺すと、指先を使って器用に内臓を引き抜き始めた。抜き取られた内臓は適当に床に放り捨てられた。「それ」は全ての内臓を抜き取ると立ち上がって部屋の中央の机に向かった。

立ち上がったまま子ネズミを机に置き、再び手に取った包丁で皮を剥ぐ。内臓を引き抜いた切り口に垂直になるように包丁を柔らかい首周りの毛皮に適切な角度でゆっくり慎重に刃を食い込ませ、子ネズミを回転させて一週させる。うつ伏せにして頭を左手で抑え、右手で人間でいう「うなじ」に当たる部分の皮を掴む。一呼吸分の間を開けて、右手を一気に尻尾まで引つ張ると、右手に掴まれた皮が手の動きに連れて綺麗に肉から離れていった。

「それ」は首から下の皮がずる剥けになった子ネズミを口に放り込んだ。一口では口に納まらなかったため、首の部分で噛みきつた。ごりごりという骨が砕ける音と、ぐちゃぐちゃという肉を咀嚼する音が混ざりあい、不協和音を奏でた。の全貌が明らかになる。「それ」ごくりと肉塊を飲み込むと、最後に残った頭を口に入れた。しばらく下の上で転がしていたが、飽きたように奥歯で噛み潰し、子ネズミの最後のパーツを飲み込んだ。

「それ」は床に置いていた仮装用マスクを拾い上げてすぐに被っ

た。長年「それ」と共に過ごしてきたそのマスクは「それ」にとつて、なくてはならない存在だった。

被り終わると、朝日が天井に空いた穴から射し込んだ。この家に時計はないが、そろそろ時刻は4時を回ろうとしている。

「それ」は日光を確認すると、階段を上がり地下室と居間を隔てる扉を開け放った。

その開け放たれた扉に射し込む朝日が「それ」の全身を包み、夜の薄暗い闇を拭われた「それ」の全貌が明らかとなった。

「それ」は身長が170センチくらいで、中肉中背の男といったところだろう。顔から下は使い古されてボロボロになった青いつなぎが覆っていて、黒いスニーカーを履いていた。黒い髪が生やされているゴムマスクは感情というものを一切排除したかのように真っ白で、無表情だった。

彼は通称「ブギーマン」、本名をマイケル・マイヤーズといった。

2：殺人

突然、玄関のドアが開かれた。

マイケルからはドアを開けた者の姿は見えないが、おそらくアベック、しかもこんな時間に情事を始めようとする馬鹿者達だろう。

なにやらぺちやくちゃ話していたが、しばらくすると玄関から延びる廊下から影が伸びてきた。

居間にアベックがやって来る。

それを見たマイケルは、気付かれないよう地下室への扉を音を立せずに閉め、彼は肉切り包丁を取りに階段をゆっくりと降りていった。一段、一段、足を踏み出す度に階段はギシギシ軋むが、ドアが閉まっているのでアベックには聞こえていない。現在、マイケルの視界は丸く切り取られたマスクの覗き穴しかないが、獲物を探し、切り裂くのには充分であった。

地下室の床に両足が着くと、すぐに机に突き刺しておいた包丁は見つかった。包丁が逆手になるように右手で引き抜こうとしたが、刺すときに力を入れすぎたのか手に力を込めなくてはいけなかった。包丁を引き抜き、そのまま階段を再び登って空いている左手でゆっくりとドアを開けた。開けた瞬間にアベックだろうか、話し声が聞こえた。

居間を見渡すと、特に荒らされた跡は無かった。ただ単に何があるか見に来ただけだったようだ。

マイケルは廊下を通って玄関に向かった。玄関には二階への階段、居間へと続く廊下、洗面所、2つの部屋に別れる廊下が見える。

マイケルは左手にある洗面所に向かおうと曲がると、ちらりと視界に階段が入った。

よく見るとしばらく使われていないはずの埃だらけの階段にくつきりと二人分の足跡があった。マイケルは二階へ上がる階段に向かった。

すると、さつきからずつと聞こえていた音が急に大きくなった。音と跡をたよりにマイケルは足音を立てずに階段を登った。

マイケルが階段から二階の廊下の床の境目から顔を音のする方に向けると、どうせ誰も来ないものだと思っっているのだろう、問題の部屋のドアは開け放たれていた。どうりでさわがしい訳である。アベックはまさかこの廃屋に人が住んでおり、その上自分達の命を狙っているなんて思っってもいない。

アベックは4つある部屋のうち、最も手前にある部屋にいた。階段を上がり終えたマイケルは、部屋に近づく。アベックは二人とも向こうを向き、連結して激しく興奮していた。

男が仰向けで女が跨がっていた。男はガッチリとした長身で、モテそうな外観をしており、目をつぶっている。女は金髪のロングにへそピアスのビッチである。

マイケルは仰向けになっっている男の足先、女の背後に忍び寄った。この距離になっても二人はまだ気付かない。余程楽しんでるのだろう。

そこで、マイケルは包丁を逆手に握った右手を自分の顔の真横に来るように振り上げた。一呼吸の間を開けて、激しく上下している女の右肩に包丁を腕だけを動かして突き入れた。

柄を握った拳は女の耳を掠り、包丁は首のすぐ横に突き刺さった。女は何が起こったかすぐにはわからなかったが、事態に気づくや否や耳障りな悲鳴を上げた。

刃先が皮膚を破り、運悪く動脈を切り裂いた。包丁は深々と肉に食い込み、マイケルが少しでも動くとも肉を傷付けた。

驚いた男は逃げ出そうとしたが、女の体の下から這い出ることが出来ず、女が無惨な死体に成り果てていく一部始終を目に焼き付けることになった。

パニックになった女は必死になっって包丁を引き抜こうとしたが、指が震えてなかなか思うように刃を掴めない。

マイケルがそれを無視して包丁を引き抜くと、動脈の断面を塞い

でいた包丁の刃が離れ凄まじい勢いで血が吹き出した。女は叫びながら震える手で傷口を抑えて吹き出し続ける血を止めようとしたが、いくら力を入れようが血は指の隙間から流れだし、女のボディラインに沿って赤い道を作っていた。

再び包丁を振り上げたマイケルは、今度は肩の力も使って包丁を降り下ろした。包丁は傷口を抑えていた手を肩ごと貫き、指を何本か切り離した。

指は切られた勢いで跳ね飛び、マイケルのつなぎに当たって埃まみれの床に落ちた。指は数回小さくバウンドすると、断面から僅かに残った血をピュツと吐き出すと、へたりとうなだれた。

その調子で幾度となく包丁を振り上げた挙げ句、女は肩をスタズタにされて失血死した。女の死体が男の上に倒れかかり、男の脱出を更に困難にしていた。

マイケルは死体を迂回して仰向けのままの男の顔の左手へ向かい、スニーカーをはいた右足を男の首に軽く乗せた。気道が狭まって男は呼吸が苦しくなり、ひどくむせた。マイケルはそれをじっと見下ろすと、右足に体重を掛け一気に男の首を踏み潰した。骨が砕ける軽快な音が廃屋に響いた。

3：解放

マイケルは二人を殺した後、死体はそのままの状態にしてすぐに廃屋を出た。

時刻は4時30分を示しており、辺りはまだ薄暗かったものの彼の行動を制限するものでは無かった。

玄関のドアを開けると、一台の白いバンが廃屋の庭に無造作に停めあるのをマイケルは見た。それはアベックが乗ってきたものだった。特に興味の湧かなかったマイケルはすぐに顔を門に向けた。

この廃屋の庭と外を区切るための両開きの門は、何か月も閉ざされたまま風雨に晒されて錆びついていた。

マイケルが門に近づこうとすると、視界に廃屋の周りを囲む塀の上に短髪の頭が見えた。

マイケルは早足で門に近づくと、左側を力強く押し開けた。軋みながら門は半分だけ大きく開いた。

外に一歩踏み出すと、目の前をさっきの頭の持ち主が通りすぎようとしていた。

彼はこの時間帯にたまたまこの辺りを走っているジョガーだった。マイケルは素早く左手を伸ばして目の前を通過しようとしていたジョガーの耳をわし掴みにした。ジョガーはさっきからマイケルに気付いていかなかったようで、突然の拘束に声も出なかった。

マイケルはジョガーを掴んだまま一歩下がってジョガーの頭から下を門の外に出したまま再び中に入ると、左足で門の下部を引っ掛けて門を引いた。

門の間にジョガーのくびはガツチリと挟まれてしまった。マイケルは首が挟まれるのを確認すると、左足から左手に門を引く役割を変え、更に強く引き始めた。

一方、ジョガーはとうとうなんとか呼吸を確保しようとして両手で左右の門を掴み引っ張ろうとしていたが、マイケルは今度は右足で右

側の門を抑え、なおかつ左手でジョガーの力に負けない程度に門を引いていたので、事態は変わらなかった。

そのまましばらくするとジョガーは一時的な酸欠状態に陥り、ガクツと力が抜けて両手が門から離れてしまった。すかさずマイケルは包丁の面とジョガーの肩が平行になるように首の真ん中に貫通するくらいの勢いで包丁を突き刺し、刃が向いている右方向に切り裂いた。空気が血と共に漏れるゴポゴポという音が早朝のハドンフィールドにながれた。

マイケルは左手と右足を門から離し、一步下がると首を傾げた。

朝露を吸い込んで湿った草にまだ喉から鮮血を噴いているジョガーの死体が倒れた。

マイケルは首を傾げた。

今度こそ左右の門を開け放ち、死体を踏みながらマイケルは住宅街に向かった。

時刻は4時45分。まだハロウィンは始まったばかりである。

4：戦慄

マイケルが最初に訪れた家は両親とまだ2歳くらいの幼い娘がひとりいる三人家族だった。

まだ早朝なので三人とも熟睡しており、更に防犯意識が薄く玄関の鍵を開けていたので、いとも簡単にマイケルの侵入を許してしまったのであった。

玄関にあがってからまず1階を物色したマイケルは人の姿が見えないとなると、2階に向かった。

階段を上がってまず正面の部屋に入ることにしたマイケルはそこで大きなベッドで三人仲良く寝ている親子を発見した。

しばらく見つめてから、ベッドの傍らに立ち前屈みになると、一番左側に寝ていた母親の胸に包丁を突き刺した。心臓をひと突きにされた母親はまどろみの中で即死した。マイケルが包丁を引き抜いた途端、大量の血が噴き出した。

その血しぶきが両親に挟まれて寝ていた娘に降りかかり、驚いた娘は目を覚ましてた。幼い娘はマイケルの姿を見ると、血を被ったせいでもあつたかもしれないが、大声で泣き出してしまった。

マイケルは娘が着ているパジャマの襟首を猫の首と同じように左手で掴み、持ち上げた。突然持ち上げられた娘はきよんとして泣き止んだ。自分の顔の高さまで娘を持ち上げ、右手の包丁を普通の持ち方に変えると、大きく腕を後ろに振って反動をつけた。

思い切り腕を降り戻して右手に握った包丁を娘の顎に真下から叩き込んだ。包丁は舌を貫き、上顎を貫き、最後に脳の中樞を貫いて止まった。マイケルが左手を離すと、死体の頭は自重によって包丁の刃を頭蓋骨のてっぺんからコンニチハさせた。

マイケルは不思議そうに首を傾げた。

母親の死体を床に降ろし、ベッドの上に両膝を乗せたマイケルは、最後に残った父親を見下ろした。まだ娘が突き刺さったままの包丁

を自分の顔の左横に振り上げ、父親の鼻柱を殴りつけた。娘の頭が鼻を砕き、痛みで父親は目を覚ました。目覚めた瞬間、父親は茫然としていたが娘に気づいた瞬間、顔がひきつった。

マイケルは父親が叫ぶまで待ち、今度は娘から飛び出た包丁を父親の右目に突き入れた。目玉と脳を損傷したが、父親は哀れにもまだ生きていた。叫び声は一層大きくなったが、気にせずマイケルは何度も娘で父親を殴りつけた。

回数が50回を超え、娘と父親の顔がミンチの様になってからやっとマイケルは腕を止めた。

ベッドから降り、包丁を上下に振って死体を床に叩きつけた。血と肉が床を汚してしまった。

重りが無くなって軽くなった包丁をしげしげと眺めてから、マイケルは家を出た。

5：不死

時刻は5時ちょうど。だいぶ太陽が昇って明るくなってきた。

血まみれの包丁を持ったマイケルがふらふらと道路を歩いていると、道端に大型トラックが停まっているのが目に入った。

座席にはカーテンがしてあり、中の様子はさっぱりわからない。

マイケルはトラックの運転席のドアに近づき、コンコンとノックをした。しかし、中から反応はない。

そこでマイケルは普通なら運転手の頭が窓ガラスを隔てた向こう側にある箇所に包丁を根元まで突き刺した。ガラスが刺さった箇所を中心に無数のヒビが入り、鈍い手応えがあった。

マイケルはゆっくりと包丁を引き抜いた。悲鳴は聞こえなかったが、包丁は血で濡れていたため、マイケルはすぐにその場を歩き去った。

100メートルほど前進したところで、後ろから大きな爆音が聞こえた。

マイケルが振り返ると、さっきの大型トラックが猛スピードでこちらに向かってくるのが見えた。さっきまで閉まっていたカーテンは完全に開いていて、運転席に頭から血を流している凄まじい形相の柄の悪い男が座っていた。

どうやら運転手は死んでいなかったようだ。最後の力を振り絞って血がついた包丁を持った犯人を轢き殺そうというのである。

マイケルは逃げようとせずにトラックをただじっと見つめていた。トラックが目の前に迫っても、マイケルは棒立ちのままだった。2つトラックはマイケルを撥ね飛ばした。

もし、時速80キロの大型トラックが人に激突したらどうなるかは言うには及ばないだろう。

マイケルは凄まじい衝撃に吹き飛ばされ、建物の二階くらいの高

さまで跳ね上げられ、20メートル先のアスファルトに頭から落下した。

反動で手から包丁がどこかの家の花壇に落ちてしまい、マイケルは背中、腰、足の順に道路に叩きつけられ仰向けに倒れた。

更にトラックは進路をずらして突進し、マイケルを大きなタイヤで押し潰した。前輪がマイケルのつま先から頭までを乗り越え、それに左右合計8つのタイヤが追い討ちをかけた。

マイケルから20メートルくらい先にトラックは停車した。

ドアを開けてよろよると運転手が降りてきた。足元がおぼつかないが、全く動かないマイケルの頭側になんとか近づくことができた。運転手はマイケルを見下ろすと、彼のマスクに血が混じった唾を吐き、トラックへ立ち去ろうとした。

その瞬間、マイケルの右腕が運転手の左足首を掴んだ。

まる何事もなかったかのように。

運転手は顔を歪め、手を振りほどこうと必死に足を動かした。

マイケルは足を掴み続け、右腕はそのままにしておき体を右に反転させてうつ伏せになってから立て膝を突いて起き上がった。運転手は左足を持たれたままマイケルに立たれたので、バランスを崩してしまい今度は運転手がアスファルトに叩きつけられてしまった。顎をしたたかに打ったので口の中を切ってしまい、舌に鉄の味が広がった。

マイケルは両手に男の両足を持ち直し、後ろに歩き始めた。

運転手はジタバタもがくが、マイケルは歩みを止めることはなかった。

彼は鉄の街灯の近くで止まった。運転手の額をいやな汗が流れた。マイケルは両手に力を入れると、ジャイアントスイングのように運転手を振り回し、街灯の柱に頭を激突させた。これがとどめとなつて、運転手は死んでしまった。

死体を地面に転がしたまま、マイケルは包丁を探しに歩き始めた。

6：墜落

マイケルが包丁を見つけたのは、なんと午前7時を過ぎてしまつてからだつた。

随分遠くまで跳んでいったものである。少し傷がついていたものの、人を切り裂くにはまだ充分に使える。柔らかい花壇の土の上に落ちたのが良かったのだろう。

一方、マイケルの方もトラックに轢かれても平気だつたとはいえ、やはり大きなダメージとなつたようで、包丁を発見してからは包丁を拾つた家の屋外に設置された物置の中で正午まで休憩していた。約5時間の間、マイケルはじつと息を潜め、身動きひとつしなかつた。

正午を過ぎたころ、マイケルは物置を抜け出し、この家の玄関に向かった。

この家の住人は祖父母とその孫の高校生の娘の3人家族で、娘は両親と死別して祖父母に引き取られたいた。彼女は高校生で平日の昼間は不在だつた。不幸だつたのが祖父母で、平日祝日問わず、いつも自分の部屋でゆっくり過ごしていた。そのため、家族のなかで真つ先にマイケルに殺される羽目になつてしまった。

マイケルは玄関のドアをノックした。しばらくすると、祖父が応対にやって来た。久々のノックに、祖父は誰か友人でも来たのかと思ひ、ドアを少し開けた。しかし、誰もいなかった。

不思議に思ひドアを閉めようとすると、不意にドアの隙間から包丁を持った腕が顔目掛けて突きだされた。ドアにはチェーンがされていなかった。

包丁の刃は祖父の両目を真一文字に切り裂いた。

祖父の視界は一瞬だけ真つ赤に染まり、チラチラと奇妙な光が瞬いた後、暗闇に覆われた。祖父は失明したことにシヨックのあまり悲鳴が出せなつた。

喉からは掠れた息だけが絞り出された。

易々と玄関に侵入したマイケルは包丁を壁に突き刺すと、祖父の首を両手で締め上げた。

祖父の目は飛び出しそうになり、舌が口からはみ出た。窒息死させずに、マイケルはものの10秒で祖父の首をへし折ると、壁の包丁を抜き取り、1階の散策を始めた。

マイケルは散策ついでに祖父の死体を祖父の部屋の押し入れの中に隠しておいた。散策を始めて10分くらいたったころ、残す部屋はただ一つ、祖母の部屋のみとなった。

右手の包丁を逆手に持ち変えたマイケルは部屋のドアをいきなり開くと、安楽椅子に座ってテレビを見ていた祖母の薄い胸に包丁を突き刺し、腹まで切り裂いた。

見事に心臓に突き刺さった包丁は胃や腸を引き裂き、それらの内容物を床やマイケルにぶちまけた。

マイケルは首を傾げた。

それから、マイケルは二階の散策を始めた。

散策を始めたものの、なんと娘が帰って来た。体調が悪くなり早退してきたのだった。

気付いたマイケルは娘の部屋のドアを開けておき、壁とドアの隙間に隠れた。

娘は帰って来てても一切の物音がしないことを不思議には思ったが、それ以上は考えなかった。

二階の自分の部屋に着き、荷物を部屋の隅に投げると、すぐにベッドに横になった。足はドアに向けていた。娘はしばらくそのままぼーっとしていたが、ふと入り口に目をやると、ドアが何か不自然なことに気づいた。娘は机の上からカッターナイフを取ると、両手で持ち、前に突きだしながら慎重にドアに近づいていった。

マイケルは娘が充分に近づくの待ち、包丁の刃が上に向くように握り直した。

娘がドアの目の前まで近づき、マイケルと娘はドアを挟んで向か

い合つ形となつた。マイケルは包丁をドアに突き刺し、ドアを強く押した。貫通した包丁が娘を串刺しにするようにドアと共に娘に迫まつた。

娘は叫びながら飛び退いた。包丁付きドアを避けた娘をマイケルは捕らえようと追つた。娘は果敢にカッターナイフを振りまわしてマイケルを威嚇した。何度も振り回しているうちに、マイケルの左手を切りつけることに成功した。

マイケルは振り向いてドアに戻り、包丁を抜き取ると再び娘に迫つた。左手から流れ落ちる血は気しなかつた。包丁を振りかざす怪人を目の前に、娘は摺り足で下がることしか出来なかつた。

娘の腰が固いものに当たつた。背後は窓、もう下がれない。マイケルは包丁を振り上げ娘に迫り続ける。娘はギョツと目をつぶりカッターナイフを胸元に構えた。このままマイケルが突っ込んでくれば突き刺してやろうと考えたからだ。マイケルは娘の考え通りにそのまま突っ込んで来た。窓に手を突き、娘に覆い被さる形で包丁を額に突き刺そうとした。すかさず娘は思い切りカッターナイフをマイケルの胸に突き出した。

その時、娘の背後の窓が割れ、マイケルと娘は宙に投げ出された。窓の真下には綺麗に整えられた芝生が広がっていた。地面に激突する瞬間に娘はマイケルの胸にカッターナイフが吸い込まれているのを見て、にやりと笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4861i/>

ブギーマンは殺せない

2010年10月15日17時31分発行